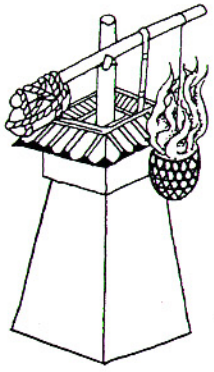
十四世紀後半、イタリアのフィレンツェでのこと。ここから花火はまたたく間にヨーロッパ全土に広がっていきました。このため、フィレンツェを近代花火発祥の地とする説も生まれました。

中国でもヨーロッパでも、火薬の知識を持つ軍人や職人の手によってちょっとした試しから花火が生まれ、それが次第に娯楽的なものへと発展していったと考えられますが、この間の歴史については、文献として正確な記録が残されていません。これは、火薬自体が危険なもので、兵器として利用されていたこともあり、中国でもヨーロッパでも秘密のうちに研究が進められていたためといえるでしょう。



烽燧

日本の花火の歴史

●日本での起こり

私たちが今、花火と聞いて想像するのは、空に打ち上げられて咲く大輪の花でしょう。これは、江戸時代末期ごろから作られ始めたもので、それ以前の打ち上げ花火は「のろし花火」といわれ、縦の火の変化を楽しむものでした。

のろしは遣唐使によって中国から日本へ伝わりました。大化の改新（六四五）では「烽燧」を整備して防衛の緊急通信用にのろしが初めて使われました。火薬は種子島に鉄砲が伝えられた時（一五四三）にともに伝わり、ここから日本での製造の研究が本格的に始まりました。

江戸時代に入り、のろしに本格的に火薬が利用され始め、中国・明（一三六八～一六四四）の時代に発達した「火槍」や「火箭」などの噴出技術を応用した「のろし花火」が生まれていきました。その一方で、中国から輸入された花火が国産化され、日本の花火の基礎が作られていったと考えられています。

花火という言葉が最初に登場するのは、江戸時代に書かれた『北条五代記』という書物の中です。また、徳川家康の一代記『武徳編年集成』や『駿府政治録』などの書物には、慶長十七年（一六一二）に家康が花火見物をしたことが記され、この花火が日本の花火史のエポックと位置付けられています。家康の見た花火は「立花火」と記

※6

され、竹の節を抜いた筒に黒色火薬を詰めて火の粉を吹き出させる、今の玩具花火の「吹き出し」を大きくしたようなものだったと想像されます。この時のものは外国製で、国産の花火の登場はもう少し後になります。

●花火師の誕生

江戸時代になり、平和な世の中になると、これまで火器や火薬類に携わっていた専門技術者たちは、身分や時代の流れの中で、火術家または花火師へと転身していきます。

少量の火薬で作ることのできる玩具花火は江戸初期から早くも出回り、都では花火売りも現れて、諸大名から庶民の間へと急速に浸透していきました。

享保十八年（一七三三）に始まった両国の花火大会は、江戸の夏を代表する風物詩としてにぎわいを見せ、鍵屋、玉屋の二大